

平成27年度 学校評価アンケート結果の分析と改善策について

今年度の学校評価に多数のご協力をいただき感謝申し上げます。以下のとおり集計結果をご報告いたします。利府高をさらに良い学校へ、また活気溢れる学校にしていこうという生徒・保護者の皆様の思いや期待に添えるよう取り組んで参ります。今後ともご理解とご協力を賜りますようお願いいたします。なお、集計結果（実現度調査）の詳細については、本校ホームページ[http://rifu-h.myswan.ne.jp/html6\_etc/evaluated.html]をご覧ください。

実施日：平成27年11月2日（月）
回収日：平成27年11月13日（金）
対象：生徒（回答数820名 回答率98.8%）、保護者（回答数817名 回答率98.4%）、教職員（67名）
「よく出来ている」、「大体出来ている」、「あまり出来ていない」、「出来ていない」の4段階での評価

実現度調査の分析と改善策【全学年共通】

アイコン表記のルール 80%以上 60~79% 40~59% 40%未満

10%以上 0~9% 0%未満

Table with 4 main columns: 実現度調査 質問項目, 良好ととらえている割合, 前年度比, 分析, 改善策. It contains 13 rows of data, each with sub-rows for 生徒, 保護者, and 教職員, showing percentages and trends for various school activities and facilities.

実現度調査 質問項目	良好ととらえている割合 「よく出来ている」+「大体出来ている」	前年度比	分析	改善策
⑭ 家庭学習を含めた自主・自立的な学習態度を育成している。	生徒	73% ↓ -2%	肯定的な回答である「よくできている」と「大体できている」を合わせた割合について、保護者72.3%、生徒73.4%とほぼ昨年度並みであるのに対して、教職員が46.3%と14.0%増加した。課題を工夫するなど、学習時間の量よりも質を大切にきた結果といえる。ただし、それでも生徒・保護者と教職員の差は依然として大きい。生徒・保護者は学習時間など量的な観点から勉強に取り組んでいると考えるが、提出された課題の質的な観点から見て教職員は「自主・自立的な学習態度」に到達していないという考えの現れであろう。	「予習→授業→復習」という学習サイクルを体験させるために各教科で学習オリエンテーションを実施し、一定の効果を見せている。しかし、あくまで一過性のものであり、宿題や課題、小テストなどを授業に組み込んだ形にし、毎日の学習習慣の確立に努めなければならない。また、宿題や課題も、量的なものよりも、考える場面を必要とする質的に充実した内容となるようにさらなる工夫をしていく必要がある。
	保護者	72% ↓ -1%		
	教職員	46% ↑ 14%		
⑮ 一般受験に対応できる学力を養成している。	生徒	70% ↓ -4%	肯定的な回答である「よくできている」と「大体できている」を合わせた割合について、保護者60.8%、生徒69.6%であるのに対して、教職員が30.0%と昨年に引き続き全質問中で最も生徒・保護者と教職員の差が大きかった。この意識のずれは、教員が一般受験に向けて身につけさせたいレベルの学力と生徒の実際の学力および学習への取り組み状況に大きな差があることを示している。また、推薦・AO入試利用者が増加し、一般受験をする生徒が少ないことから、実際に指導に関わっている生徒・教員がごく一部しかいないことも影響していると考えられる。	授業では基礎基本の徹底を図り、課題や小テストなどをうまく組み合わせることで学習内容の定着を目指す。さらに成績上位者の意欲を引き出すような発展的な内容についても積極的に紹介していく。 大学全入時代となり、一般受験以外の受験方法も増えたため、志望校を安易に変更する生徒も目立ち始めた。進路指導部と協力し、1・2年次からの啓蒙的な進路指導も実施していく。また、教職員も研究会等を利用して、一般入試に関する最新の情報を共有していく。
	保護者	61% ↓ -5%		
	教職員	30% ↑ 15%		
⑯ 3年間を見通した計画的・継続的な進路指導体制が確立されている。	生徒	83% —	肯定的な回答である「よく出来ている」と「大体出来ている」を合わせた数値については、教職員が73.2%、保護者が78.4%、生徒が83.3%となっている。総合学習で行っていることの意味・意義について保護者への情報提供が少なかった点が反省である。	今後は、3年間を見通した進路行事の精選と内容の工夫・改善に努力する必要がある。その結果として生徒が自主的に進路選択ができるような力を身に付けさせたい。教員が目的意識を共有できるような3年間のシラバスを作成し、身に付ける力を意識できるようにする。
	保護者	78% —		
	教職員	73% —		
⑰ 「総合的な学習の時間」における進路指導が充実している。	生徒	86% —	肯定的な回答である「よく出来ている」と「大体出来ている」を合わせた数値については、教職員が77.6%、保護者が77.7%、生徒が86.2%となっている。3年間を通して、「どのような力を身に付けさせたいのか」の情報発信が少なかった点が反省である。	生徒の多くは総合学習の各行事の意義を理解し、積極的に取り組んでいる様子が見られる。生徒・保護者・教職員に対しては、総合学習で行っている行事の内容や意義を十分理解していただくため、保護者や地域への情報の発信を怠らないように注意していきたい。
	保護者	78% —		
	教職員	78% —		
⑱ 個に応じた適切な進路指導が行われている。	生徒	80% —	肯定的な回答である「よく出来ている」と「大体出来ている」を合わせた数値については、教職員が77.6%、保護者が73.5%、生徒が80.5%となっている。3年次では進路に応じた個別指導があるが、1・2年次では個別な指導があまり出ていないことも時間的な問題であるのも事実である。	1・2年次では全体指導の中で、自分の適性や目的意識から自ら進路を考えて欲しいと考えている。その中から出てきた個別な悩みなどには相談できる体制を整えていきたい。また3年次になり、各自の進路希望に応じた指導については、更なる充実をさせていきたい。
	保護者	73% —		
	教職員	78% —		
⑲ 全校清掃、校内外の美化活動を実践している。	生徒	83% ↓ -2%	総じて肯定的意見の割合が86.4%となっており、校内美化・清掃について一定の評価をいただいた。しかし、教職員と保護者からは前年度と同様の評価をいただいたのに対し、生徒の肯定的評価は82.7%であり、肯定的ポイントはやや下がっている。生徒との認識の差を埋められるように今後工夫するとともに評価の向上に努める必要がある。	全体で肯定的意見が多かったことは嬉しい。先生方にはご苦労をおかけしているが、環境美化は日常清掃の徹底が重要である。監督の先生方の指導と生徒の頑張り今後もお願いしたい。一方校舎内外の老朽化に伴い、掃除をしてもきれいな状態を維持していく必要がある。今年度もトイレ清掃に業者が入るが、予算等の問題もあるが校舎内の他の箇所にも業者による清掃をしていただいたり、場合によっては校舎の改築や修繕も必要になってくるのではないだろうか。
	保護者	90% → 0%		
	教職員	93% → 0%		
⑳ 「人の集まる図書館づくり」に努め、学習センターとしての機能が充実している。	生徒	62% ↓ -6%	肯定的な回答である「よく出来ている」と「大体出来ている」を合わせた数値については、教職員が75%、保護者が71%、生徒が62%となっている。教員や保護者の評価としては、部活動顧問による推薦図書や小論文対策資料などの充実による評価と思われる。しかし、図書館の利用は3年次が多く、1・2年次は授業での利用が中心となっているため、生徒と教員との認識に差が見られる。	教職員や保護者の肯定的意見もあることから、学習センターとしてさらに学習に役立つ資料の収集や、学習環境の整備に努めていきたい。一方、生徒の利用は、受験が目前に迫ってきただけで中心であり、この点が生徒との意識の差であると考えられるので、1・2年次のころから、生徒が少しでも本に親しみを持って、知識教養の充実に役立つ本や資料の整備・案内を行い、認識の差をうめていくようにしたい。
	保護者	71% → 1%		
	教職員	75% ↑ 16%		
㉑ 衛生管理を徹底し、生徒の健康の保持増進に努めている。	生徒	84% ↓ -1%	肯定的意見が生徒84%、保護者87%、教職員88%とおおむね取り組まれている。生徒の健康の保持増進は先生方の日頃のご指導によるものが大きく、各クラスや部活動で、きめ細やかに配慮されているものと考えられる。昨年度と比較すると、肯定的意見について、保護者は変わらないが、教員は2%、生徒は1%減少している。	保健だより等で定期的に情報発信はしているが、掲示物の充実、行事のお知らせ等にメール配信システムを活用する等、積極的に情報や取り組みを発信するよう努めたい。感染症については今後増加する傾向があるため、なお一層啓発活動に努めるとともに、石鹸や手指消毒液の補充、マスクの提供などを行ってきたい。
	保護者	87% → 0%		
	教職員	88% ↓ -2%		
㉒ 自主自立の精神を身につけさせ、主体的な活動を促す指導が行われている。	生徒	83% —	今年度からの新項目であり、今年度の結果は現状把握と捉えたい。何より教員の評価が、三者の中で最も低く、主体的な活動を促す指導の具体性を生徒指導部で示せなかったことが、大きな要因と考える。まずは各クラスのHR活動や各種委員会、行事などで先生方が指導されている生徒の主体的な取り組みを支援できる体制作りを進めていくことが先決である。	中期目標のなか「チーム利用高」という言葉があるが、今年度はこのことが具現化できなかったと反省している。先生方個人としては、それぞれ生徒に日々の活動の中で指導される姿が多く見られたが、生徒指導部が率先できなかった。まずは生徒会や委員会活動で、スムーズな進行と同時に、生徒裁量の実験的取り組みを経験させる場としての理解をお願いしたい。
	保護者	85% —		
	教職員	70% —		
㉓ PTAや同窓会活動の充実に努めている。	生徒	—	「PTAや同窓会活動の充実に努めている」の質問項目について、「よく出来ている」「大体出来ている」の割合は高く、保護者・教職員ともに8割を超えている。PTAや同窓会活動について、案内や参加の呼びかけを継続して行っていることが、ある程度評価されている。一方で、「あまり出来ていない」「出来ていない」と評価する数字が15%くらいになっているのは、PTA行事等の案内が周知されていないことや行事に参加する一般会員の数が少ないことが原因ではないかと分析する。	PTA総会については、校内の各分掌と連携して企画し参加者が増えるように努めていく。さらに広報活動も継続していく。環境整備奉仕活動、文化祭のPTA体験学習については、一般会員の参加がさらに増加するように、本部役員・年次PTAの協力をお願いしながら運営していきたい。PTAの行事を更に活性化させるために、内容の充実に努めると共に会員の理解が得られるように運営していきたい。
	保護者	84% → 1%		
	教職員	85% → 1%		

実現度調査の分析と改善策【1年次】

実現度調査 質問項目	良好ととらえている割合 「よく出来ている」+「大体出来ている」	前年度比	分析	改善策
① 体験学習（オープンキャンパス参加）をとおして、大学で学ぶ意義についての学習し、進路に対する視野を広げる指導が行われている。	生徒	85% → 1%	「よく出来ている」「大体出来ている」という肯定的意見の割合が生徒85%、1%、保護者ともに84%と高かった。今年度は、普通科は東北大学において学問・研究の最先端の世界を知るための体験学習を行い、スポーツ科は仙台大学において専門に関する体験学習を実施した。普通科に関しては他大学での体験学習を希望する声も多かった。普通科に関しては他大学での体験学習を希望する声も多かった。更新の検討が必要であると思うが、スポーツ科科については今年度の実施形態でいいように感じた。否定的意見の割合が約1割割いるので、実施前にもう少し体験学習について情報を発信する必要があると感じる。	9割弱が体験学習については肯定的な意見を持っているというデータを見、体験学習自体は実施する意義があるものと判断してよいのではないかと感じる。今年度の実施形態であれば、スポーツ科科はより専門的な体験学習ができると思われるが、普通科科においてはもう少し選択の幅があってもよいように思う。未知の体験という意味では他大学での体験学習であれば東北大学での体験学習も選択に入ってよいと思うが、進路行事という枠内で考えれば、生徒の進路実態に合った体験学習場所の選定が必要だと感じた。来年度は、身の丈にあった体験学習場所も選択肢に入れてはどうだろうか。
	保護者	85% → 1%		
② 継続的な週末課題等の実施により、家庭学習の習慣化が図られている。	生徒	83% ↓ -1%	肯定的意見が生徒82.5%、保護者75.3%とやや家庭内での認識に差が生じている。生徒本人はやっているつもりであっても、保護者に見ればもっとやって欲しいという気持ちの表れではないか。週末課題を「こなす」ことで満足し、学習内容の定着までを考えて取り組んでいる生徒が少ないため、本当の意味での学力は身に付いていないように感じる。	本校において部活動の位置づけは非常に重要であり、部活動中心の学校生活を送る生徒が多いことは本校の特色として維持されるべきであるが、同時に学習についても同じ比率で考えなければならない。いくら時間の使い方や学習の意味を説明しても、本人がやる気にならなければ意味はないので、まずは、学習の重要性、学習をしないことによるデメリット等をしっかりと伝え、自ら進んでやらなければならない状況を作る必要があると感じている。
	保護者	75% ↓ -11%		

実現度調査の分析と改善策【2年次】

実現度調査 質問項目	良好ととらえている割合 「よく出来ている」+「大体出来ている」	前年度比	分析	改善策
① 一日総合大学をとおして、実際の大学等の講義を体験し、進路選択についての意識を高める指導が行われている。	生徒	85% ↓ -3%	生徒の85%が肯定的意見であった。また、行事直後のアンケートでは「進路の参考になった」という回答が97%にのぼり、多くの生徒にとって進路選択を考える契機となったようだった。 一方、保護者回答では生徒より2ポイント低かったが、有意差は無いと考えられる。学校からは特に保護者に通知をしなかったが、生徒から保護者に雰囲気伝わったのではないかと考えられる。	90分の講義は長く感じる生徒もいたが、かえって上級学校の雰囲気を知る貴重な経験となっている。この時期は暑い時期で、生徒に集中して講義を受けるよう求めるのも酷であり、実施時期の検討が必要であろう。また、生徒が興味・関心を持つ分野・内容の講義をいかに多く設定できるかということ、保護者への開催通知や、見学・聴講案内を出すことも考えていくことも必要であろう。
	保護者	83% → 1%		
② 自学自習の習慣を定着させるため、週末課題と家庭学習時間調査の実施が継続的に行われている。	生徒	88% → 3%	肯定的意見が、生徒・保護者ともに高いが、生徒の88%が肯定的意見であるのに対し、保護者回答は75%と大きく差がついた。大部分の生徒が家庭で週末課題をやることで勉強だと思え、保護者はそれでは足りないと感じているようである。 また、今回の結果には出ていないが、年次の教員も家庭学習が足りないと感じており、生徒の認識との差も気になる。	習慣化はされてきたようであるが、まだ「やらされている」という受け身の状態である。主体的に取り組む姿勢を養わせる方策を検討したい。 「課題」や「学習時間調査」は次年度も継続して実施していき、その取り組み状況や提出状況は機会あることに通知していきたい。
	保護者	75% ↓ -7%		

実現度調査の分析と改善策【3年次】

実現度調査 質問項目	良好ととらえている割合 「よく出来ている」+「大体出来ている」	前年度比	分析	改善策
① 放課後の課外や夏季休業中の学習会などを計画的に実施することにより、恒常的な学習習慣を確立させる指導が行われている。	生徒	85% ↓ -7%	肯定的意見が生徒で85%、保護者で86%であり、特に生徒は前年比7%低くなったが、数値的には実現度は高いと言える。これは部活動を引退した後の学習状況を表しており、進路が決定するまでの数値である。また、進路決定後は必ずしも継続しているとは言えないところもある。	基本的な学習習慣は1年生の時に確立させるものであって、3年生になって急に確立できるものではない。ただし、本校では部活動の比重が高いこともあって、学習習慣の確立が遅い生徒が目につくのも事実である。部活動と学習の両立を図るためにも休休み等を利用した課外（隙間学習）などの指導を積極的に行う必要がある。
	保護者	86% ↓ -1%		
② 希望する進路に応じたガイダンスや学習会を実施し、より明確な目標と学習計画が立てられるような指導が行われている。	生徒	84% ↓ -3%	肯定的意見が生徒で84%、保護者で70%であり、前年と比較して若干落ちている。3年次では進路別のオリエンテーションなどを実施し、個々の進路に応じた指導を継続して行っているが、よりよい指導のあり方を模索していく必要がある。	生徒一人ひとりに対して、的確なデータの提供ときめ細かな指導をさらに徹底していく必要がある。また、三者面談は年1回であるが、複数回の面談を要望する保護者の方もおり、状況に応じて面談を複数回行うことも必要かもしれない。
	保護者	70% ↓ -15%		